

子どもの苦手意識に着目した音楽授業の実践

～図形楽譜を使って～

発表者 湯澤 卓 (上越市立春日小学校)

Keywords 小学校音楽科教育, 図形楽譜, リズムカード, 子どもの苦手意識, 授業の工夫

1 研究の動機

「先生、僕は楽譜が苦手なんです」と、A小学校に勤務していた当時、4年生のBさんが話しかけてきた。筆者は音楽教育を専門としており、それまで子どもが楽譜に親しむことができるように様々な支援をし、手立てを講じてきた。A小学校では音楽専科としてBさんの授業を担当し、それまでと同じように楽譜の成り立ちや構造に注目し、楽譜に親しむことができるようになる手立てを講じて授業を行っていた。

Bさんは楽譜を読むことができるようになりたいという思いをもつよりも、楽譜が苦手だから音楽が好きではないという思いをもっていた。Bさんと何度か話をしているうちに、Bさんにとっての「楽譜が苦手」という言葉の意味が2つの構造で見えてきた。一つは音符の羅列と楽器の音の配列とが一致しないという感覚をもっていることである。もう一つは、耳で覚えることができるから楽譜の必要性を感じられないということである。

筆者は、Bさんの楽譜に対する苦手意識をどのように払拭したら良いかを考え、いくつかの授業を行った。結果として、Bさんが楽譜に対する苦手意識を克服することはできなかつた。そこで筆者は、楽譜という存在から一旦離れ、何か違う形でBさんや、その他の楽譜に対する苦手意識をもつ子どもに対するアプローチとしての授業を構築できなかと考えた。そこで注目したのが図形楽譜である。

本研究では、Bさんの学級で実際に行った授業を基に、図形楽譜の効果や有用性について述べ、その後のBさんの実際を紹介する。

2 図形楽譜を使った実践「ボディーパーカッション」

- (1) 単元名 「ボディーパーカッション」
- (2) 実践児童 A小学校 4年1組 35名
- (3) 実施期間 2017年11月～2017年12月(全5時間)
- (4) 単元のねらい

○図形楽譜を様々に組み合わせたり並べたりしながらリズムパターンをつくることを通して、自分の考えや工夫を反映させて音楽をつくることのできる実感を得る。

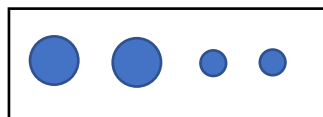
○グループの仲間と意見を共有したりアイデアを反映させたりすることを通して、表現に対する互いの思いや考えを伝え合い、それぞれのよさを認める。

(5) 単元の構想と展開

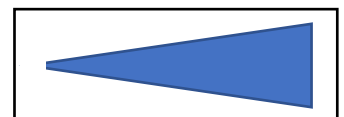
本単元は、図形楽譜を媒体とし、ボディーパーカッションを用いながらオリジナルのリズムパターンをつくることを活動の最終的な目的とする。図形は、円と台形(横向き)を基本とし(資料1, 2)、子どもの意見を取り入れながらバリエーションを増やしていく。図形楽譜は、教育芸術社の「小学生の音楽4」(2015)を参考にして筆者が再構成した。

図形楽譜はカードにして提示する。カードは、1枚を4分の4拍子の1小節として取り扱う。カード

にする理由は、小節が固定されるので並び替えたり組み合わせたりする時にずれが生じないことと、並び替えたり組み合わせたりするのが容易で、子どもが取り掛かりやすく、また楽しんで活動に参加すると考えたためである。本単元では、一般的な楽譜が苦手な子どもでも安心して、楽しみながら活動に参加することができると思



(資料1) 円を基本としたカード。大きな円は大きく、小さな円は小さく叩く。4拍の意識付けにもなる。



(資料2) 台形を基本としたカード。徐々に大きくなる。カードを逆にすると徐々に小さくなる。

ている。楽譜から離れてリズムを作ったり演奏したりする体験を重ねる機会とし、音楽の楽しみを味わって欲しいと願う。

(6) 単元の指導計画

次	時	「」活動のテーマ・活動の内容	○教師の支援や実施上の留意点
1	1	「自分の体を楽器にしてみよう」 ・手拍子や足踏み、口笛など、自分の体から発することができる音を探す。 ・どのような響きや特徴があるかを共有する。	○ホワイトボードに予め人間の形を描き、音を出すことができた体の部分をメモしていく。 ○必要に応じてDVD「Stomp LIVE」のボディーパーカッションパートを鑑賞する。
	2	「図形楽譜であそぼう」 ・円や台形で作られた図形楽譜の使い方を知り、並べたり順番を変えたりしながら図形楽譜に親しむ。	○円と台形の2パターンの図形楽譜カードを使って導入する。最初に円を提示し、図形楽譜カードを4拍で取り扱うことを意識させる。 ○学校用オルガンでベースリズムを流す。
	3	「組み合わせと並べかえでレベルアップ」 ・限られた数のカードを並べたり組み合わせたりしながら、少人数のグループで演奏してみる。 ・出来上がったカードによるリズムパターンを、近くのグループで共有する。	○円のカード(図1)と台形のカード(図2)を2枚ずつ渡し、向きや並べ方を変えながらグループの中でいろいろなリズムを作って良いことを助言する。 ○出来上がったら近くのグループと作ったパターンを交換する。 ○様子を見ながらカードの枚数を増やす。
2	4	「図形楽譜でオリジナルリズムを作ろう」 ・少人数のグループに別れ、使用するカードを決めてオリジナルのリズムパターンをつくる。	○イメージが共有されたり意見が揺れたりしている間はカードを固定させない。おおよそのイメージが共有され、お互いに納得してリズムが決まってきたら、A1サイズの模造紙に貼り付けていくように助言する。 ○1次と同様に、学校用オルガンでベースリズムを流し、テンポが一定になるようにする。
	5	「リズム発表会」 ・グループごとに発表し、互いの良かったなどを伝え合う。	○ビデオで撮影し、振り返りの要素の一つとする。 ○意見交流シートには、「上手でした」「よかったです」のような抽象的な表現ではなく、なぜ良かったのか、どのようなところを上手だと感じたのかを少しでも具体的に述べるように声を掛ける。

(7) Bさんの変化から

単元全体を通して、Bさんはリズムづくりを楽しんでいた。組み合わせたり並べかえたりする時には、ある一定のパターンを作り、それを繰り返す事によって演奏しやすくなる事を感じ取っていた。具体的には、カード4枚で1パターンを作り、それを2回～3回繰り返して演奏してから次のリズムパターンに進むようにする。ただ繰り返すのではなく、演奏する人を増やしたり減らしたり、音の大きさを変えたりしながら演奏していた。演奏を通して、音楽を形づくる要素を活用しながら演奏できるようになっていったのである。

単元の最後に、Bさんは「音楽には繰り返しが隠れている」と感想をまとめた。後日行ったビゼー作曲「アルルの女」の「メヌエット」の鑑賞では、曲の中に隠れている繰り返しを基に音楽を聴き、繰り返すたびに曲の雰囲気が変わっていく様子を感じ取ってまとめた。また、器楽奏「茶色の小びん」ではリコーダーを担当し、楽譜上の1段目と2段目が繰り返し、3段目と4段目が繰り返しになっている事に気付いていた。

楽譜に対する苦手意識を払拭したとは言い切れないかもしれない。しかし、Bさんが自信をもって音楽に取り組むことができるきっかけになった。

3 ヒントとなった実践「リズムプレイ」

(1) 単元名 「リズムプレイ」

(2) 対象児童 2年生

(3) 単元のねらい

○リズムカードを用いてリズムパターンをつくる事を通して、リズムをつくる面白さや演奏する楽しさを味わう。

(4) 単元の特徴

本単元は、筆者が2014年から2年生を対象として取り組んでいる。2年生は、初めて音符と休符を詳しく学習し、リピートなどの記号や音楽を形づくる要素の言葉にも触れる学年で、いわば楽譜の入門期と言える。子どもがリズムカードを通してたっぷりと音符に親しむ時間になるように意識して構想・展開している。

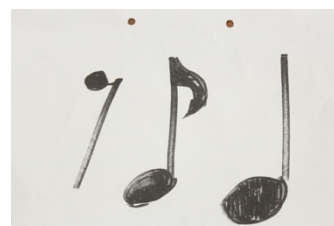
取り扱う音符は4分音符、8分音符、4分休符、8分休符である。リズムカードはA4サイズの紙1枚とし、1枚が4分の2拍子の1小節になるようにする。現在のリズムカードは、教育芸術社の「小学生の音楽 2」(2015)を参考に、6種類作って実践している。(資料3, 4)。

「ボディーパーカッション」のヒントとなったのは、カードを使った活動であるという部分である。カードを使ってリズムをつくることによって、並べたり組み合わせたり入れ替えたりすることが容易

になる。また、枚数を制限したり使用するカードの種類を限定したりすると、その条件の中でオリジナルのリズムをつくろうと、子どもはアイデアを出し合い、意見を交換し、音楽のよさや面白さを表現しようとする。自由に並べることができるフレキシブルな部分と、条件や制限などを楽しみながら活動できる遊び性がある部分が、この単元の特徴である。この特徴を、「ボディーパーカッション」に反映させた。



(資料3) リズムカードの例。4分音符2つが基本になる。



(資料4) 音符と休符が混ざったリズムカードの例。

(5) 単元の指導計画

次	時	「」活動のテーマ・活動の内容	○教師の支援や実施上の留意点
1	1	「音符と休符」 ・4分音符、8分音符、4分休符、8分休符を知る。 ・サンプルパターンを手拍子で叩く。	○教師の支援や実施上の留意点 ○音符と休符は大きく掲示する。 ○音符は「タン」「タ」、休符は「ウン」「ウ」と擬音化して提示し、手拍子の補助にする。 ○サンプルパターンは4種類を各1枚、計4枚で構成する。始めは教師が示し、並べ替えは代表の子どもが行う。
	2	「リズムカードであそぼう」 ・リズムカードを並べたり組み合わせたりしながら、いろいろなリズムを作って叩く。	○リズムカードは逆さまに使わない事を指導する。 ○最初に提示するのは4種類とする。子どもの様子を見ながら、新しいカードを欲しがったりリズムパターンに発展が感じられなかったりした様子があったら残りの2種類を示す。 ○学校用オルガンでベースリズムを流す。
	3	「オリジナルリズムを作ろう」 ・4枚のリズムカードを組み合わせ、オリジナルリズムをつくる。	○4枚をどのように選ぶかは子どもに任せる。 ○4枚のカードはどのように組み合わせてもよい。途中でカードの種類を変えてもよい。 ○個人の活動を基本とするが、周りの子どもと意見を交流したり、その意見を自分のリズムに反映させたりする姿を称賛する。

2	4	「オリジナルリズムで『かえるのがっしょう』」 ・少人数のグループに別れ、使用するカードを決めてオリジナルのリズムパターンをつくる。 ・「かえるのがっしょう」に合わせてリズム演奏に挑戦する。	○グループは4名を基本とする。『かえるのがっしょう』は鍵盤ハーモニカで既に学習しているので、鍵盤ハーモニカで演奏する子どもがいてもよいことにする。 ○学校用オルガンでベースリズムを流し、テンポが一定になるようにする。
	5	「オリジナルリズムで『ぷっかりくじら』」 ・少人数のグループに別れ、使用するカードを決めてオリジナルのリズムパターンをつくる。 ・「ぷっかりくじら」に合わせてリズム演奏に挑戦する。	○「ぷっかりくじら」も既習である。歌と鍵盤ハーモニカ、手拍子で構成するが、要望があればカスタネットなどを使用してもよいことを伝える。
	6	「リズム発表会」 ・グループごとに「かえるのがっしょう」「ぷっかりくじら」を選択し、発表する。 ・互いの良かったなどを伝え合う。	○ビデオで撮影し、振り返りの要素の一つとする。 ○振り返りシートは、リズムを作った感想と演奏した感想の2点でまとめられるように支援する。

4 おわりに

「ボディーパーカッション」の構想・展開を通して、筆者はそれまで考えていた楽譜に対する指導を改める必要性を感じた。これまでは、楽譜のもつシステム性を理解する事を入り口としていた。そのため、楽譜に対する知識・理解を授業づくりの視点としてきた。しかし、その形では既に苦手意識をもっている子どもの意欲的な学びにつながらない。それどころか、苦手意識を高めてしまったり、苦手意識を自覚化させてしまい、学習に対する意欲を下げたりすることにもつながりかねない。

子どもの苦手意識を払拭し、あるいは解消するためのアプローチとしては、学習者である子どもが音楽そのものに向かう過程を重視しなければならない。「ボディーパーカッション」から見えてきたのは、子どもの「遊び性」の大切さである。音符を覚えることや楽譜が読めるようになることを主眼とするのではなく、子どもが楽しんで音に関わったり音楽をつくったり演奏したりすることに主眼を置くと、単元の構想・展開が変わってくる。今回は図形と音楽をつなげることで子どもの苦手意識にアプローチした。見方を広げると、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた活動であるとも言える。苦手意識をもっている子どもがシステムを理解するためには、いくつかのハードルを超える必要があるのだろう。そのハードルが何であるのかを明らかにすると同時に、本当にそのハードルは子どもの学びにとって必要なかを問いながら、今後も研究を続けていく。

<参考>

小原光一他(2015)「小学生の音楽 4」教育芸術社, 40-41 頁

小原光一他(2015)「小学生の音楽 2」教育芸術社, 40-41 頁

湯澤卓(2018)「遊び性を発展させる音楽づくり授業アイデア」, 『子どもファースト』でつくる! 音楽授業プラン成功のアイデア 明治図書, 90-99 頁